

# S と の こ と

伊集院 理子

S と私が最初に出あったのは、二年前の四月、三歳からの持ち上がりの子どもたちに、四歳から十四名の子どもたちが加わって、新しいクラスとしてのスタートをきった入園式の日のことであった。それまでは、二十名だった子どもたちが、三十三名にふくれ上がる人数の変化には、圧倒されるものがあった。人数の変化だけでも騒然とした感じを覚えるのに、その日は生憎の雨で、何とな

く子どもも落ち着かない様子で、“前途多難”という印象の幕明けであった。

そんな中で、“この子は手強いぞ”という気持ちを私に抱かせたのがSであった。Sは、わざと椅子の上に立ってみたり、椅子から立ちあがって動きまわったりしていた。ただ何もわからずに興奮して騒いでいたのではなく、Sは、新しい集団の中に、自分が後から入っていくことを敏

感に感知して、意識していたか、意識していなかったかはよくわからないが、自己を誇示しているように思えた。何もかもお見通しの上で行動しているような印象をその日私はSから受けた。

四月の最初のうちは、新しい環境の開拓に心が奪われていたという感じで、その「手強さ」を発揮し始めたのは、四月の終わりから五月にかけてであった。

Sの両親は共働きで、母親は常勤の勤務医であった。母親がSを迎えに来られるのは、一週間のうちで一日で、その他の日は、日替わりでお迎えの人が変わる毎日であった。お迎えの人は、SのことをSの祖母の家まで連れていくのが仕事である。四月の間は、Sが三歳の時にちがう幼稚園に通っていた時にも送り迎えをしてくれた人が迎えに来てくれていたが、その人の都合が悪くなったため、五月に入って、急きょお迎えの人が変わることになった。その頃から、Sは、お帰り

の時に顕著な形で抵抗を示すようになっていった。お帰りの時間になると、わざと園庭に逃亡して戻って来なかったり、「もっと遊ぶ」と言っていて、自分が使っているものをがんとして片づけさせないようにしたり、片づけようとしている友だちをたたいたり、お帰りの体制を整えようと友だちが椅子を並べようとすると、椅子を振り回して妨害したりした。ある時、新しいお迎えの方に一旦渡した後、Sは「おばあちゃんの家に行きたくない。新しい自分の家に帰りたい」と私に訴えてきた。そして、自分の身のまわりのことは何でも自分でできるSが「外ぐつをはかせろ」と私に命令して、自分からぐつをはこうとしなかった。その時、私は、降園後、楽しい時間が待っていないSの辛さ、無理をしいられているSの生活をつきつけられた。

Sの満たされなさは、お帰りの時だけではなく、自分のやりたいことがうまく見つけられない

時や、一つの遊びが一段落して次の遊びに移る移行の時などに表面化した。他の友だちのやっていることを妨害してみたり、通りがかりに手や足を出して友だちを威嚇したりした。じゃまをされたら、不意討ちをくらった相手がSに対して向かっていこうものなら、自分が犯されることに対して異常に過敏に反応するSは、向きになって、徹底的にやり返さなくては気がおさまらなかつた。そういうSを力ずくで押さえこまざるを得ない事態が毎日のように起こった。

Sは何をしでかすか分からない、Sが荒れだしたら手に追えない、という考えがいつも私の心を覆っていた。一方、Sのような無理をしいられている子どもは、良い所も悪い所もまずは丸ごと受けとめてあげなければいけないという概念的な考えにも私の心は縛られていて、その両者の間を揺れ動いていた。今から思えばSが荒れだすとまず力は押さえこんで、その後、慌てて「先生は、

Sちゃんのことよく分かっているわ。Sちゃんは、しめたかったから、しちゃったのよね」などと勝手に解釈したSの気持ちを押しつけていたように思う。力で押さえこんだ後味の悪さがいつも心に残った。その後味の悪さを、もしそうしなかつたら他の子どもにも大変な危害が及んだにちがいないと思うことで打ち消そうとしていた。でもその後味の悪さは、そう簡単に打ち消されるものではなかつた。その後味の悪さを少しでも補いたいという気持ちから、Sの本当の気持ちを受けとめるのではなく、今から思えば、Sに迎合してしまっていたように思う。

Sの一挙手一投足に、私は振りまわされた。Sが比較的調子よく過ごせた日は気分がよく、反対に、Sが荒れた日には打ちのめされたように落ちこんだ。毎日の保育がとても苦痛に感じられた。Sとの問題状況での悪循環を自分から断ち切ろう、Sとの関係を変えていこう、変えていこうと

しても、なかなか自分の方からは変わっていきけなかった。

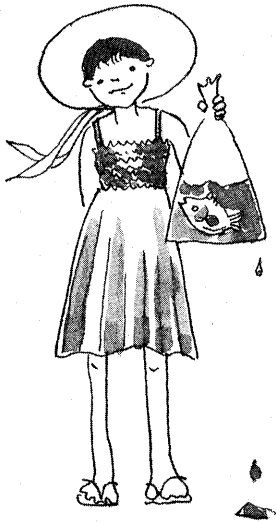
しかし、Sはいつも荒れているばかりの子どもではなかった。自分のやりたいことがはっきりあって、その事に対しては、とても意欲的に自分の力を出して工夫して取りくむ子どもであった。

物事に集中して取りくんでいる時のSに対しては、Sのこうしたいという思いが満足できるような形で達成できるようにと思い、援助をつみ重ねていった。

Sは、やりたいことがある時はとても落ちついて取りくむのだが、相変わらず、空白の時には人を困らせることばかりでかし、こちらのSへの関わりも、咎めたり、制する関わりから、どうしても逃れられなかった。

そんな状況で、新しい春を迎え、Sたちは年長児になった。年長になったからといって事態は急に転回してはくれなかった。

でも、年長になって幼稚園中の遊具を最優先に使えるようになって、Sの遊びへの集中度、遊びの中でのSの力の発揮の度合い、まわりの友だちのSの力への承認度が増していった。



ある時、Sは他の男児数名と、遊戯室で大型積木とブロックを全て使って、基地とその基地につながるトンネルのようなものをつくりあげた。つくりあげて少ししたら、片づけの時間になってしまい、ちょうどその日はSのクラスが遊戯室の片づけの担当の日で、Sのクラスの仲間が遊戯室に集まってきた。Sたちがつくったものはとても立派で、魅力的だったので、男女を含めて数名の子どもが、Sたちに、中に入れてみていいかと尋ねた。Sは「いいよ」と簡単に受け入れた。そこで入りたい人がトンネルのような入口から基地に入って、最後にSたちがもう一度入ってからみんなで片づけようということになった。次が、最後のSの番という所で、トンネルのようなものが崩壊してしまい、Sはどうしてももう一度つくり直して、自分が入ってからでないと片づけれないと言いはった。降園の時間はもう目の前にせまっており、クラス全員の子どもをこれ以上待たせるわけ

にはいかなかった。でも、私としてはSの気持ち  
が痛いほどわかった。私は、SとSに協力して主  
に力を発揮してそれをつくりあげたもう一人の男  
児とに他の友だちはもう帰らなければいけない時  
間だから部屋に戻るが、二人はもと通りに直すま  
で遊戯室に残ってやっていると伝え、他の先生に  
事情を話し、遊戯室に残した二人を見守ってもら  
うことにした。他の子どもたちを降園させ、遊戯  
室に戻ると、ちょうど元通りに直せたところで、  
Sともう一人の男児は一度だけトンネルをくぐっ  
て基地に入ってから降園した。その時の私の判断  
が正しかったかどうかは何とも言えないが、その  
時、心から私がSの気持ちになれたとはじめて思  
えたような気がした。

そのことが転機になったかどうかは分からない  
が、その頃からSの方が私への関わりを変えてき  
た。これまで、私がSの行動を咎めたり、制した  
りすると、Sは抵抗を示すばかりであったが、気

持ちを少しずつであるが素直に出してくれようになった。「だって、〇〇が、入れてくれなかつたんだもの」Sの口からそう言う言葉が聞かれるようになった。そうなる、「そうだったの」Sの気持ちに心から私も共感できるようになっていった。共感した後には、「でも、そういう時はしつた方がよかつたんじゃない」一言いうと、ちゃんと聞く耳をもつてくれるようになっていった。こちらの言う通りにすぐなるわけではないが、これまでは一度荒れると長びいて手当たり次第被害を及ぼしていたSが自分で気持ちを立て直せるようになっていった。

思い返せば、辛い長い道のりであった。随分と遠回りをさせてしまった。教師である私の方がSとの関係を変えていかなければならなかったのに、それができなかった。Sの方が私とSとの関係変革の先駆けとなってくれた。それからは、Sとの関係、他のクラスの子ともとの関係を心から楽し

めるようになった。私がSのことに心を奪われ、自分自身を変えていくことができなかつたことが、どれだけ他の子どもにも影響を及ぼしたかわからない。Sだけではなく、クラス全員の子どもに遠回りをさせてしまった。

卒園式の日、記念撮影をした。この二年間の間にも、行事の折など、時々クラス全員で記念撮影をしてきた。Sを記念撮影におさめるのはいつも大変だった。私がりなりになってSを無理矢理おさえている写真が残っている。卒園式の日「Sくんのとなりでとうろかな」という私の一言に、Sは無言で答え、Sと私は記念写真の真ん中におさまった。私の心に深く残る写真になるだろう。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)